

恩師の
思い出

戦時中の2人の「英語の教師」

高松の2年生のときに英語を教わった秋山平吾先生（在勤・昭和16年3月～22年4月）のことを、よく思い出します。太平洋戦争まっただ中で、世の中では英語は敵国言語、カタカナの言葉が世間から消え、野球でも「プレイボール」始め「ストライク」1本、2本」などと言っていました。英語を学ぶことそのものが悪いことのように言われていました。

そんな時代でしたが、私たちの高松では、英語の授業が平常時と同じように行われていました。

秋山先生は、

「みなさんが英語の勉強をするということは、アメリカのひとつひとつの場所を占領することと同じなんです。相手のことをよく理解しなければ、戦争に勝てるはずがない」

と、こんこんと話してくれました。あの先生の真剣なまなざし、声、それを全身で聞く私たち。そのころのことは今でもはつきりと覚えています。先生の伝えたいことは私たちの体にしみ込みました。

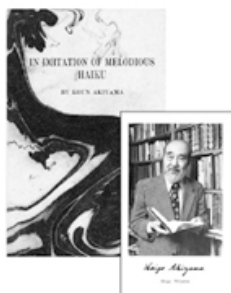
みんな本当に真面目に勉強していました。

その学年から何人か東大に入りました。

秋山先生が米寿になられるとき、先生への感謝を込めて、記念にみんなで何かお手伝いしようと考えました。秋山先生は芭蕉の俳句を英文に訳していましたので、我々が出版しようということになり、本を作って、みんなに配りました（写真）。国会図書館にも配りました。

これは私たちの歴史と思いのつまった宝物のような本です。孫に受け取ってもらう予定です。

もう1人、英語の教師で長谷川清先生（在勤・昭和12年9月～24年3月）がいました。



『IN IMITATION OF MELODIOUS HAIKU』
秋山平吾先生の米寿祝いに、中47回生が編集・制作した。装丁は故・永井郁氏（89ページ参照）。

少し首を傾げる癖のある方だったので、みんな「ダッシュ」（アポストロフィのこと）とあだ名を付けました。英語の教師であるというだけで肩身の狭い思いをしていらっしやうたでしょうに、「戦争反対」を訴え続けていました。

あの時代「英語の教師」であった先生方は、きっとひと言では言い尽くせない思いを抱えながら、生徒たちを教えていたのでしょう。

いろいろな先生方の思いを受け継いで、私たちの今があるのだと思います。



飯田中学校の入学式にいたでも入りの門札は、今でも大切にしている（7ページ参照）

平田達（中47回）

●ひらた・さとし

昭和5年伊賀良生まれ。在京飯田高校同窓会元会長。同窓生それぞれが年齢を超え、職業を超え……、感動の交歓ができる場でありたい（1ページ参照）と本誌を立ち上げた一人。弁護士。昭和34年より弁護士事務所開設。著書に「心の種時き」（こま書房）。趣味は囲碁。